

大学におけるキャリア支援を考える

— 学業満足度および大学生活の充実度と仕事観、将来展望 —

國眼真理子

I 問 題

大学におけるキャリア支援教育とは、良識ある社会人を育成するために、職業をめぐる社会や自分についての理解を深め、人生の中で担うさまざまなキャリアの意義を考える機会の提供をねらいとする生き方支援教育である。就職した後は自らが所属する組織に依存していればよかった従来のキャリア形成から、他者とのかかわりの中で自分を見つめ、キャリアを自らデザインする力を育成する教育への転換が求められており、その基盤の形成に大学教育が寄与するところは大きい。

すなわち大学におけるキャリア支援とは、単に実務的な就職活動のためのノウハウの伝授、インターンシップの導入や単位化、あるいは各種資格取得講座の設置といった集合的かつ出口指導に重きをおいた支援のみならず、個々の学生が学びの意味をつかみ主体的に職業的な価値観を形成し、人と関わる力や意思決定力を育むことができるような教育上の支援である。

キャリア教育ないしキャリア支援というと、とかく直接「働くこととは」「職業とは」といったテーマが取りあげられがちであるが、学生が生活基盤である大学生活や学業に対していかに前向きな意識をもち満足感や充実感を抱くことができるかがポイントであり、それがキャリア支援の根本にあると考えられる。事実「進路意識」「大学教員とのコミュニケーション」「大学満足度」の三つが強い相関関係にあるという指摘（松高、2004）や大学生活への適応や自己評価を規定する要因として学業が果たす役割が大きいという指摘（溝上、2001）がある。

青年が社会人職業人として自立を果たすには自己を知り、社会を知ることが重要であることはいうまでもないが、自分を知るには他者との関わりを通じた

多様性の認識と未来へ向けた自分づくりを促していくことが肝要であり、学生の学業満足度を高め、多様な活動を通して大学生活に対して充実感を抱くことができるよう積極的に支援することが大学におけるキャリア支援の基盤となると考える。

II 研究の目的

上記の問題意識に基づき、本学におけるキャリア支援の基礎資料とすべく、学生生活と彼らの仕事観や時間的展望に焦点をあてその実態を把握することが本研究の目的である。具体的には、大学での諸活動への参加状況と大学入学後の学業の満足感や大学生活全般の充実感との関係、およびそれらと仕事に対するイメージや過去・現在・未来の自己評価との関連を検討することがその目的である。

III 方 法

予備的な検討を行うため他大学で調査Ⅰを実施し、その結果に基づき、本学において調査Ⅱを実施した。

調査Ⅰ

- 1) 調査期間 2004年9月
- 2) 調査対象 A大学（地方総合大学）において文学部、法学部、経済学部
に所属し教職課程を履修する学部2、3年生115名（男性55名、女性56名、
性別不詳4名）
- 3) 手続きおよび調査内容

「学生の消費生活に関する実態調査」「学生生活実態調査」（溝上、2004）を参考に質問紙を作成するとともに、仕事に関するイメージ語については、「仕事」から連想されることばを自由記述で求め、3名以上が想起したものを項目として採用し、オリジナルな質問紙を作成した。調査項目の概要は以下のとおりである。

- ・大学生活に関する質問項目：学内学外での活動への参加と関与度、大学生活での重点、日ごろ気にかかること、大学入学後の学業への満足度と学生生活の充実度
- ・キャリアに関する質問項目：アルバイト経験の有無とその意義、インターンシップという言葉の理解と関心度、「仕事」イメージ（Semantic Differential法）
- ・時間的展望：3年前の自分、現在の自分、10年後の自分を1～10段階（不満足から満足）で自己評定

調査Ⅱ

- 1) 調査期間 2005年1月
- 2) 調査対象 本学学部1～4年生552名（内訳1年179名、2年174名、3年：87名、4年：110名、学年不詳2名：男性324名、女性222名、性別不詳6名）
- 3) 手続きおよび調査内容（調査Ⅰに同じ）

Ⅳ 結果と考察

1. 学生生活に関して

① 学内サークル・部活動への参加状況

学内サークル・部活動への参加率は61.2%と高く、「熱心に活動」36.4%（以下括弧内、A大、32.1%）「まあ熱心に活動」が42.4%（20.5%）と、8割近くの学生が学内での活動に参加しており、熱心に参加している学生が多い。

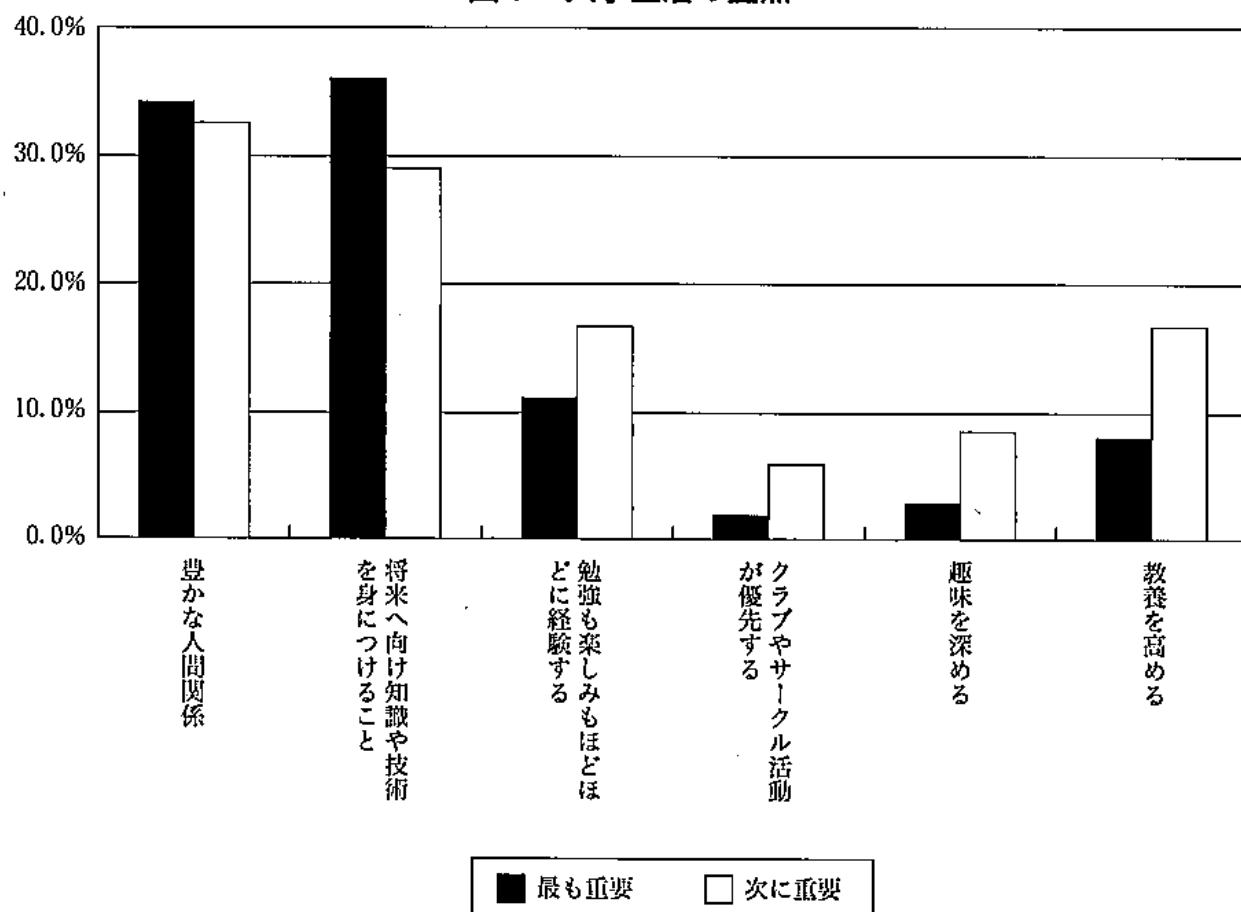
② 学外活動の有無と参加状況

学外での活動へ参加したことがある割合は68.2%（23.5%）と高く、学内サークルや部活動への参加率を上回る。A大と比べ極めて高い割合である。また参加状況も全体では46.5%の学生が「熱心」「まあ熱心」に活動に取り組んでいる。地域と連携した活動が多い本学の特徴がうかがえる。ただし今回はどの程度の期間参加したのか、どのような役割を担ったのかについて詳細は不明である。

③ 大学生活の重点

「豊かな人間関係を築くこと」「将来へ向け知識や技術を身につけること」「勉強も楽しみもほどほどに経験する」「クラブやサークルの活動を優先する」「趣味を深める」「教養を高める」「その他」の7つの選択肢のなかから、大学生活においてもっとも優先していることを、次いで優先しているものはどれかを尋ねた。「将来へ向け知識や技術を身につけること」(36.0%)「豊かな人間関係を築くこと」(34.2%)が多く選択され、「教養を高める」「趣味を深める」「クラブやサークル活動を優先する」の選択率はいずれも10%以下であった。(図1)

図1 大学生活の重点



④ 日常気に掛かること

「専攻」「就職や進学などの進路」「経済的な問題」「授業やレポートなどの学業」「人生観」「健康」「対人関係」「クラブやサークルの運営」「自分の性格」「自分の能力」の10の選択肢の中から、日常最も気に掛かること

はどれか、次いで気に掛かることは何かを尋ねた。日常最も気に掛かることは「進路」が最も多く、「対人関係」がつづいた。これらの傾向はA大も同様であった。

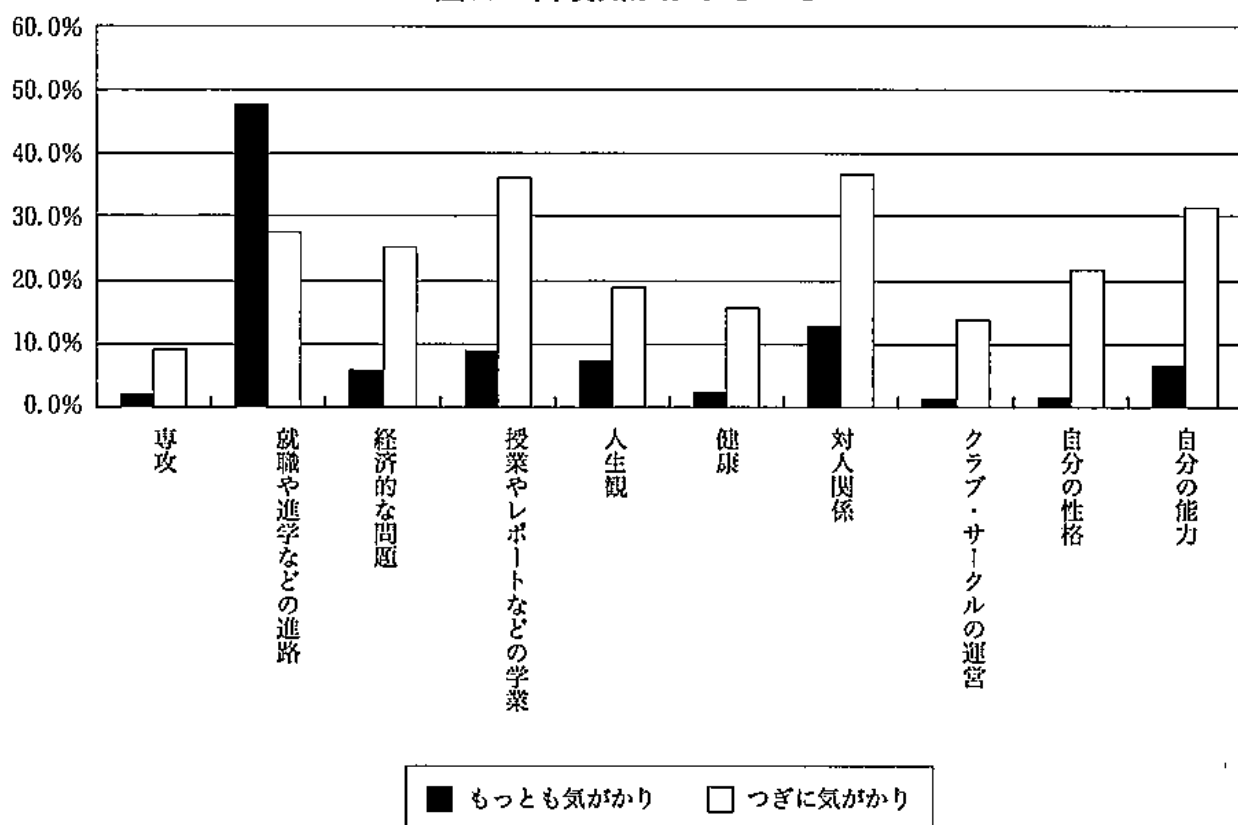
「進路」に関しては、1年（46.9%）＜2年（52.3%）＜3年（67.4%）と学年が上がるにつれ高くなるが、調査時期が1月であったため進路が定まる4年（26.4%）では低下している。

また1、2年次では3、4年次に比べ、「学業」の選択率が高く、「最も気に掛かる」「気に掛かる」を合わせた割合では1年で69.2%、2年では48.3%とかなり多くの学生がこの項目を選択している。以下に述べるように、大学での学業に関する満足感は学生生活の充実感や将来展望と関連が高いことを考え合わせると、今後学生の修学問題に対する具体的な対応が必要であると思われる（図2）

⑤ 大学入学後の学業に対する満足感や大学生活への充実感

A大とほぼ同様の結果を得た。学業満足感と生活充実感との間には高い正の相関（.47、 $P<.01$ ）が見られた。大学入学後の学業に満足している

図2 日頃気がかりなこと



学生ほど、大学生活全般の充実感が高いことがわかる。

2. キャリアとの関係

① アルバイト経験の有無

高校時代にアルバイト経験がある学生は38.3%であった。また大学入学後では、1年生では未経験の学生が31.3%いるが、全体では経験率は82.6%とかなり高い。アルバイト経験が将来のキャリアを考える上で有効か否かについては、有効であると認識する学生が52.3%であった。

② インターンシップの理解と関心度

インターンシップの認知度は1年生が7割弱とやや低かったが、2年87.9%、3年95.5%、4年100%と極めて高い。インターンシップ経験者は調査対象者の2割強と少なかったがキャリアを考える上で有効であったと認識している。

③ 保護者が望むキャリアと学生自身の進路希望

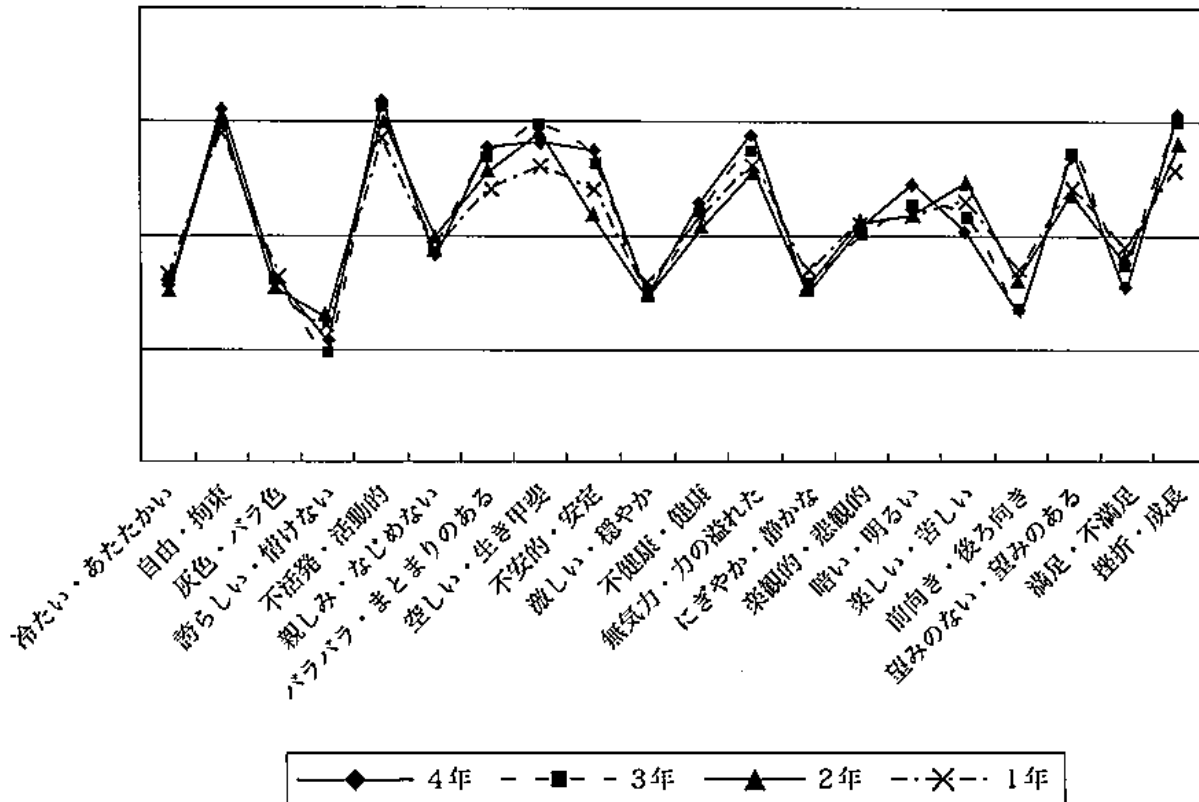
保護者の希望と本人の希望には相違がないとするものが多いが、学年が上がるにつれ、食い違いがあるとするものが多くなり、その割合は、1年29.1%<2年31.6%<3年39.3%<4年42.7%と、進路選択が現実的な課題になるにつれ拡大している。

3. 「仕事」についてのイメージ

「仕事」についてのイメージを図3にある対になった項目を用いて、5段階での評定を求めた。学年ごとに検討したところ、4年と3年の間および2年と1年の間ではイメージに差は見られなかったが、4年と1年で差が見られたものは11項目（ $P<.05$ 、うち8項目が $P<.01$ ）、3年と2年の間では5項目（同4項目）に差が見られた。全般的に1、2年生は「どちらともいえない」という中立的な評価が多く、仕事に対するイメージは曖昧であった。3、4年生は1、2年生以上に仕事を「成長」「希望」「前向き」「活動的」「満足」「生き甲斐」につながるものと肯定的に捉えている（図3）。

ついで「仕事」ということばのイメージを構成する潜在要因の探索を目的として因子分析（プロマックス回転後、スクリー基準によって因子数を決定）を

図3 学年別「仕事」イメージ



グラフ上の位置が下方にあれば、各形容詞対の左にある語句のイメージが強く、上方にあれば、右に書かれた語句のイメージが強いことを意味する。中央の線よりも離れるほど、その傾向が著しい。

行ったところ、「希望」「不安」「安定」の3因子を抽出した（表1）。同様の手続きによって求めたA大学の結果と比べると、本学学生の「仕事イメージ」には将来に対する前向きな「期待」が示される一方で、A大にはみられない否定的な「不安」因子が存在し、仕事に対してアンヴィバレントな感情が存在することが明らかになった。この不安因子がいかなる要因によって規定されるのかを今後明らかにする必要がある。

4. 時間的展望（過去・現在・未来）に関して

① 「大学入学後の学業に対する満足度」と時間的展望

大学入学後の学業満足度が現在および未来の自己評価に大きく影響し、学業満足度が低い学生は高い満足度の学生比べ、現在、未来のいずれの評価も低いことが統計的に有意であった（ $P < .01$ ）（図4）。A大調査では学業満足度の影響は現在の自己評価にのみ働き、未来の自己評価へは影響は及んでいない。

表1：「仕事」に対するイメージの因子構造（プロマックス回転後）

<本学>

変数名/因子	第1因子：希望	第2因子：不安	第3因子：安定
情けない-誇らしい	-0.556		
不満足な-満ち足りた	-0.504		
活動的な-不活発な	0.542		
まとまりのある-バラバラな	0.542		
望みのある-望みのない	0.556		
力の溢れた-無気力な	0.560		
成長していく-挫折しそうな	0.596		
生き甲斐のある-むなしい	0.620		
安定した-不安定な	0.647		
明るい-暗い		-0.599	
あたたかい-冷たい		-0.577	
バラ色-灰色		-0.505	
後ろ向き-前向き		0.444	
拘束される-自由な		0.556	
苦しい-楽しい		0.600	
悲観的な-楽観的な		0.693	
静かな-騒々しい			0.498
穏やかな-激しい			0.590

<A大学>

変数名/因子	第1因子：成長	第2因子：希望	第3因子：安定
悲観的な-楽観的な	-0.707		
なじめない-親しみのある	-0.626		
後ろ向き-前向き	-0.515		
安定した-不安定な	0.485		
成長していく-挫折しそうな	0.592		
健康な-病的な	0.685		
苦しい-楽しい		-0.694	
情けない-誇らしい		-0.504	
望みのある-望みのない		0.459	
バラ色-灰色		0.477	
生き甲斐のある-むなしい		0.512	
活動的な-不活発な		0.564	
穏やかな-激しい			0.625
静かな-騒々しい			0.715

*表中の数値は1.0～-1.0の間で変化する因子負荷量であり、各形容詞対と因子との関連の度合を示す。数値が大きいほど関連の度合いが大きい。本報告ではひとつの因子について因子負荷量が.400以上であり、かつ2つの因子にまたがって.400以上の負荷を示さない項目を選択。

② 「大学生活の充実度」と時間的展望

大学生活に充実感を抱くことができない学生は、現在の自分の評価が低いだけでなく未来の自分をも低く見積もっていることが明らかになった ($P < .01$) (図5)。

図4 大学入学後の学業満足度と時間的展望

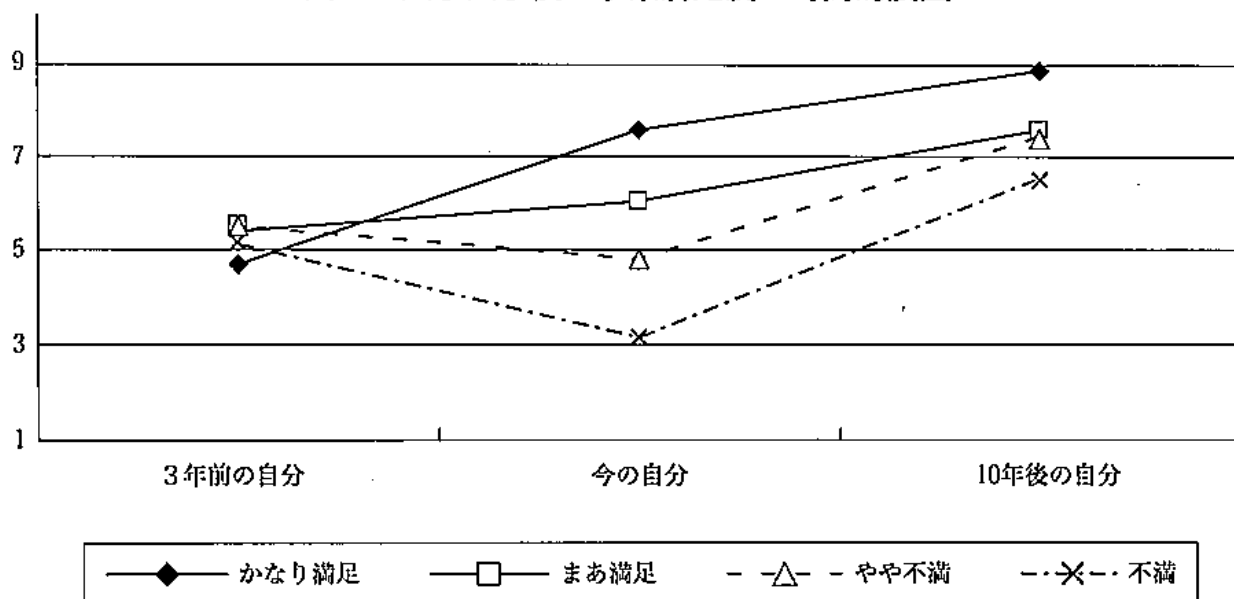
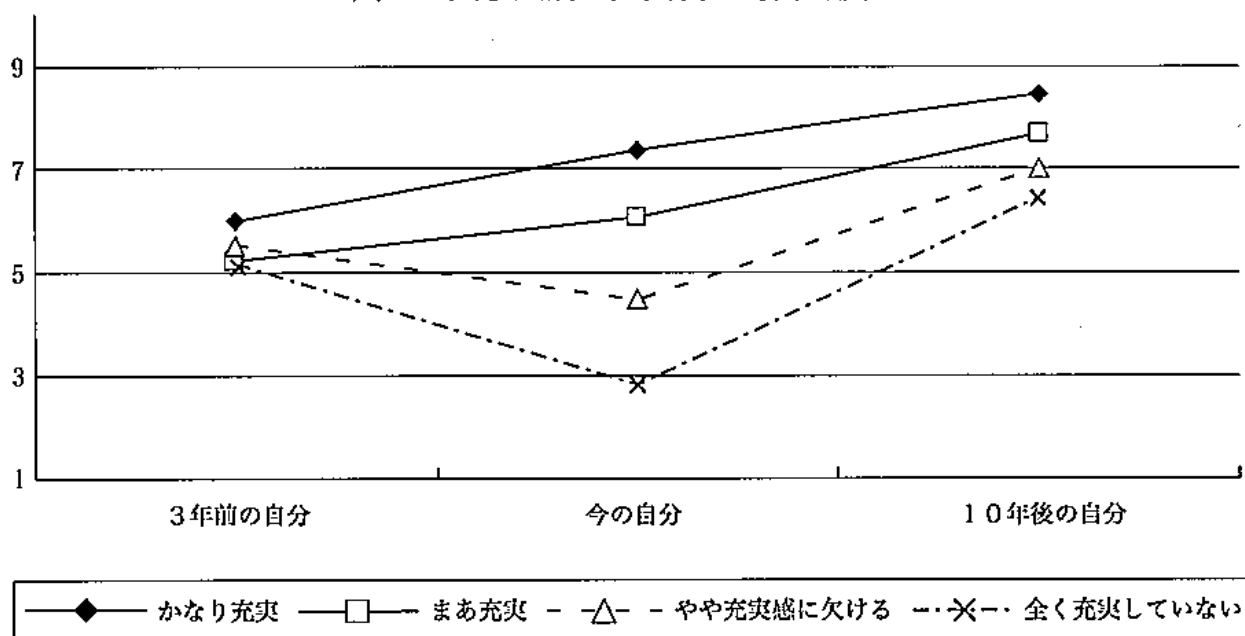


図5 大学生生活の充実度と時間的展望



V 結 語

今回の調査によって大学入学後の学業に対する満足度が大学生活の充実度と関連すること、またや大学生活の充実度が将来展望や仕事イメージに関与していることが浮かび上がってきた。今後聞き取り調査によってより具体的な行動や意識の面での違いを明らかにしつつ具体的なキャリア支援につなげていきたいと考える。

2001年に欧州委員会が著した「若者に関する白書 (Commission of the European Communities, 2001)」では若者のライフコースが個人化多様化していること、少子高齢化によって若者の人口比率が低下していること、グローバル化時代であるという視点から、①若者を意志決定プロセスに参加させ社会参画を促すこと、②若者の経験分野を拡大すること、③若者の自律性を促すことといった三つの柱を立てて若者政策を提起し、EC加盟各国へ協力を求めている。なかでも②の「若者の経験分野の拡大」は、EC各国のみならず我が国でも考慮すべき重要な視点であると考え。すなわち高学歴社会において若者は職業社会への参画にあたって絶えず社会経験の不足というジレンマを抱えるが、その打開策として「経験」を重視するのがこの視点である。すなわちよき市民としてのセンスは従来の定型的な学習だけではなく、家族・学校・友人関係・地域といったさまざまな領域における参加経験によって補強されうるものであり、教育や訓練を伝統的で定型的な方法のみに偏ることがあってはならないというのがその主旨である。

本学学生の学内外の活動は地域との密接な連携の上に成り立っており、800人程度の小規模大学であるにもかかわらずその活動範囲は多岐に渡るとともに多くの学生がそれに参加している。広義のキャリア形成という視点から見たとき、それらの活動は多様な人との関わりと経験の蓄積という意味からその果たす役割は大きいことが推察され、今後その効果を検証していきたい。

またキャリア形成支援は学生のニーズや意識と合致していなければ成果は上がらない。正課教育の充実を図りながらキャリアを見据えた教育を展開していくためには、学生の大学教育への満足度を高める内容や意欲の喚起を図ることができる講義の工夫が欠かせない。学生自身が主体的に関わることによって一

層キャリア意識の開発が図られると考えられるからである。

名古屋大調査（2005,7月）によれば、全国の国公私立208大学のうち80%の大学において職業意識の形成に関わるキャリア支援科目やキャリア講座が開設され、大学でのキャリア教育は一層の拡大を見せているが、教育と支援の効果については未だ検討途上にある（浦上、2005）。今後とも実態の把握を重ねつつ教育や支援の効果を明らかにしたいと考える。

VI 謝 辞

本調査を実施するに当たり、ご協力いただいた本学の教員並びに学生の皆さんに篤く感謝いたします。

VII 参考文献

1. 浦上昌則「キャリア関係研究の動向」教育心理学年報第44集（2004年度）日本教育心理学会 2005
2. 大久保幸夫編「新卒無業」東洋経済新報社 2002
3. 奥井めぐみ「地方大学の教育と就職」Business labor Trend独立行政法人労働政策研究・研修機構 2004,7
4. 國眼真理子・八重澤美知子・苗田敏美「文系学部生の大学生生活満足度・充実度と職業イメージとの関連 ―キャリア支援のための予備的検討―」金沢大学教育開放センター紀要 2006
5. 國眼真理子・八重澤美知子・苗田敏美「キャリア発達・教育に関する研究（Ⅰ）」「同（Ⅱ）」第48回日本教育心理学会大会論文集 124-125
6. 小杉礼子「フリーター 自由の代償」日本労働研究機構 2002
7. 小杉礼子、堀有喜衣編「キャリア教育と就業支援」勁草書房 2006
8. 社団法人日本私立大学連盟就職委員会「転換期を迎えた学生支援―就職支援から見えてきた課題―」 2004
9. 社団法人日本私立大学連盟就職委員会「キャリア支援に向けて―学生の豊かな人生のために―」 2004
10. 社団法人日本私立大学連盟「いま求められる学生支援―学生委員会・就職委員会連携を考える小委員会報告―」 2005
11. 社団法人国立大学協会教育・学生委員会「大学におけるキャリア教育のあり方

- ーキャリア教育科目を中心にー」 2005
12. 白井利明「大人へのなりかた」新日本出版社 2003
13. 中村一郎「パネル・ディスカッション キャリアセンター化後の展望と課題」(平成17年度拡大学生就職支援協議会「キャリアセンター化の直面する課題ー重要な大学固有の教育力ーレジュメ・資料集」より) 社団法人日本私立大学連盟就職委員会 2005
14. 松高政「キャリア教育再考 ー進路意識を高めるカギは教員との交流による満足度ー」Between 2004,9 (No.207) 進研アド
15. 溝上慎一「現代大学生論 ーユニバーシティ・ブルーの風に揺れるー」日本放送出版協会 2004
16. 文部科学省「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」2004